

新発見あれこれ (3)

奥原 弘 人

H. Okuhara : Some new or noteworthy plants found in Nagano Prefecture (3)

1. カエデの雑種 昨年秋木曽郡山口村大戸の落葉樹林でウリカエデとハナノキの雑種とみられるものを見つけた。そこには何本かのウリカエデがあったが、それに混ってハナノキによく似た葉のものが1本あった。これは葉が3裂し裂片は卵状三角形で鋭尖頭、不整の鋸歯がある点は大井日本植物誌に記述されているとおりであるがハナノキと異り下面が粉白色でなく樹皮はウリカエデ特有の黄緑色であった。この地のウリカエデは葉が一般とやや異ってほとんど3裂せず先端は円頭で全体やや小型であるから、その中に混っているこの1本は特に目立った。

この地にはハナノキの成木も何本かあって結果もするので、この1本はウリカエデとハナノキの雑種と考えられる。カエデ類で雑種として発表されているのは極めて少なく、これは新しい雑種とみられるので便宜上和名をウリハナカエデと呼ぶこととした。

2. アザミの雑種 南安曇郡安曇村の湯川谷はフジアザミの多い所であるがナンプアザミやノリクラアザミも見られる。昨年秋この谷を歩いていてノリクラアザミと並んで立つ極めて大きな頭花の1株が目についた。近づいて見ると道側にはフジアザミも大きな頭花をつけていて1m以内にこの3株が立っていた。直感的にこれは両種の雑種と気づいた。

草丈は側のノリクラアザミと同じくらいで葉は下面は白色であるが長さは40cmを越えるものもあってノリクラアザミよりはるかに大きく側脈も太く顕著である。この辺のノリクラアザミは何れも鋸歯縁でユキアザミ型が普通であるが、これはやや浅裂状である点はフジアザミに近い。頭花は長さ4cm、径5cmとノリクラアザミより大きい。総苞片もノリクラアザミより大きく色は黒紫色のフジアザミに近いがフジアザミのような刺針はない。

このようにこのアザミは花や葉がノリクラアザミとフジアザミの特徴を集めたようなもので両種の新しい雑種とみられるので便宜上和名をノリクラフジアザミと呼ぶこととしたい。

尚先年トオヤマアザミとして発表したアズマヤマアザミとフジアザミとの雑種は他の地にもありそうと考えていたところ、この村のダム沿いにも2株あったことを附記する。

3. 別型のカミコウチアザミ アズマヤマアザミとノリクラアザミとの雑種とみられるものを何ヶ所かで見てきたが、その最も確定的とみられる上高地に因んで、これをカミコウチアザミとしたことは先に本誌で述べたとおりである。これらは何れも頭花のつき方が枝を長くのばすノリクラアザミ型であった。

昨年秋木曽川本流の味噌川谷でも同じ型のものを見たが、ここではこのほかに違った型のものに気づいた。それは頭花の柄が短くアズマヤマアザミ状に茎に連続してつく型であるが他の種のように何個も集ってつくことはない。頭花や総苞片などは今まで見てきたのと変りはないので両種の雑種という点に変りはない。

このほか安曇村と奈川村で見たものの中には長く枝をのばして、それに連続して頭花をつける型のものもあって、雑種の性質上いろいろな型のものがあることを知った。

4. コワニグチソウについて 先年木曽三岳村でタカオワニグチを見つけた後、松本市外袴腰山の1300m辺でも似たようなものを見つけたが、これは林内であるためか花つきが悪く数本あったうちの1本だけに貧弱なものが1、2花ついた程度で充分に観察することが出来なかったので1株を掘取って庭に植えたところ数本に殖えて花をつけるようになったが苞のつき方がタカオワニグチとは少し違うように見えた。

1 昨年三岳村のタカオワニグチのあった所から北3kmの所でも、これに似たものを数本見た。更に昨年木曽檜川村で見たものも、これらに苞のつき方が似てはいるが、これは甚だ変化があって、1花序に花や苞が2個とは限らず花は2個あるのに苞は大きなのが1個であったり、花も苞も1個であったり、また3花2苞であったり1花無苞であったりと一定せず全体として苞が開出せず大きくて幅が最大13mmのものもある。尚池田登志男氏が北佐久郡立科町で採ったのも、これに似たようなものであるが、これらに共通してタカオワニグチと異なる点は苞が小梗の上端についている点である。

ところでタカオワニグチに似たものに北海道のコウライワニグチソウと南佐久郡川上村で発見された

コワニグチソウがあり、この2種は苞のつく所も多少違うようであるが決定的な違いは花糸の粉状毛の有無であるという。視力が弱いので清水会長にお願いして粉状毛のあることが分かった。これで、これらは何れもコワニグチソウであることが分かった。

ただコワニグチソウは苞が小梗の中程につくのが普通であるが、これらは上端につく点で異っているが保育社の図鑑によれば山梨県塩山市のものも上部のようであり、それよりは粉状毛の有無の方が重要であろう。このようにしてコワニグチソウの分布の広いことが分かったので今後その他の所でも見つかる可能性がある。

ただし楢川村のものは苞が大きく開出ししない点その他からみて1品種と認めることも出来そうである。その場合はこれをキソワニグチソウと呼ぶこととしたい。

5. タニウツギの分布 裏日本要素の一つとみられているタニウツギについては西は鳥取県の大山から北は青森県にかけて分布を知ることが出来た。長野県内でも新潟県寄りの各地で多く見られるが、その南限については不明である。北安地方では神奈川博物館研究報告で高橋・平林両氏がブナ帯の山地各地

にありとし、南安の郡誌にも目録には出ているが具体的な地名は出ていない。東筑摩郡松本市誌にも生坂村にあると記されているが、この地は現在北安曇郡に編入されている山清路で、清水教授と横内文人氏の採品があるので、これが一広南限とみられた。

しかしそれから南には進んでいないのか、南安にはないのかという点に注意してきたところ一昨年安房峠と中の湯との間でバスの中からそれらしいものを見、昨年その標本も採ることが出来た。

安房峠から西にはニシキウツギが目につくが平湯温泉に下ればタニウツギも見られる。飛騨地方は植物地理上裏日本の一部とされていてタニウツギも広く分布しているので、この地への分布は飛騨側と関係をもつように考えられる。今後もこれより南や北安との中間の分布に注意したい。

6. 賤母国有林の植物について訂正 本誌第11号に掲載した本国有林の植物目録中、*P. tipuloides* Lindl. ホソバノキソチドリを *P. ophrydioides* Fr. Schm. var. *australis* Ohwi ナガバキソチドリと訂正する。

この報告にあたり種の同定には清水会長のご指導をいただいたので感謝の意を表する。

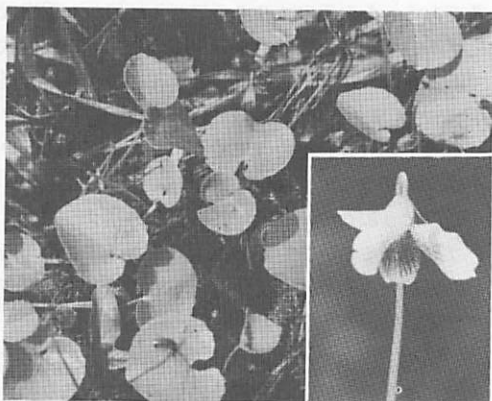
〔植物ニュース〕72. チシマウスバスミレ *Viola blandiformis* Nakai var. *pilosa* Hara

1983年6月12日、柳は下高井郡木島平村馬曲の奥赤ダレ湿原——標高およそ1370mにおいて、湿原植物の観察を実施し、タテヤマリンドウの群生を確認した。その際スミレも分布するので種類を知りたいと考えた。6月19日、藤澤と柳は、同湿原を踏査し、リュウキンカ・ハクサンチドリ・マイヅルソウ・タテヤマリンドウ・モウセンゴケほか60種近い植物を記録した。この折、スミレにはチシマウスバスミレとアギスミレがあり、前者は小群落であり、後者は大群落であった。チシマウスバスミレは開花も観察でき、果実も熟していた。また葉面の白毛もみられ、ほふく茎もみられた。このスミレは昭和29年5月31日、横内斎先生が下水内郡栄村野々海池畔で発見されたのが県下初の記録であった。藤澤はこの折の調査行に同行したがその6年後の昭和35年8月5日、下高井郡木島平村カヤノ平北方の北ドブ湿原にて再発見し、チシマウスバスミレの南限分布地として記録した。今回の赤ダレ湿原の発見は前記録の23年後にあたるが前記南限地より1300mほど北に存在している。馬曲奥には本澤湿原もあり今後調査したい。

チシマウスバスミレは1828年にW. Becker によ

り、カムチャッカより記載され、南カムチャッカ・南カラフト・千島列島に産し、日本では北海道(根室)・秋田県(鳥海山)・岩手県(五葉山)・群馬県(尾瀬)・福島県(駒止湿原)・栃木県(横根山)・長野県(野々海湿原・北ドブ湿原・赤ダレ湿原)に分布する。しかし現在野々海湿原では池畔開発により絶滅したようにみえる。

チシマウスバスミレは、今後、木島平村・栄村の奥地湿原で注意深く調査する必要がある。



チシマウスバスミレとその花

(藤澤正平・柳莊一郎)